

子どもと出会う(3)

「スキンシップ」考

岩田 純一

知覚のいろいろ

心理学のなかで、人の知覚は古くから中心的な研究領域の一つである。人は異なった感覚受容器をもち、そこからさまざまな情報を得ている。それらの感覚様相は、大きく遠感覚と近感覚とに分類されている。遠感覚とは視覚、聴覚であり、近感覚は触覚、嗅覚、味覚や内臓感覚、運動感覚、平衡感覚といった感覚を指している。ま

た遠感覚は高等感覚、それに対して近感覚は初等感覚ともよばれる。しかし、同じ感覚受容器でありながら、なにゆえ高等や初等として区別されるのであろうか。

遠感覚とは、刺激源が身体から離れたところにあっても、その方向・距離が認知できるものである。したがって、視覚や聴覚といった感覚器官がこれに相当するのである。視覚や聴覚は、自己身体の外部に投影される世界である。そこにみえるものに手を伸ばし、その音源に

耳を傾けられる世界なのである。一方の近感覚とは、刺
激源が身体そのものに近接してしか知覚できない感覚世
界であり、まさに触覚、嗅覚、味覚などといった感覚が
これにあたる。

人にとつては、どの感覚も大切なものである。とりわ
け目と耳から入ってくる感覚情報はより重要なものであ
る。人はその生活の多くを視覚や聴覚情報に頼って生き
ざるをえないからである。近感覚が身体にはりついてい
るがゆえに主観性を強く帯びているのに対して、遠感覚
の情報是对象化され、他者とのあいだで共有し、客観的
に検証することができる知覚世界である。また対象化さ
れた知覚世界はことば（記号）によつて概念化されやす
いのである。したがつて膨大な遠感覚からの情報をこと
ばによつて概念化し、それを相互に伝え合うといったこ
とも可能になったのである。本を読む、映画をみる、講
演を聴く、音楽を鑑賞するなどといった活動を思い浮か
べればよいだろう。かくのごとく記号的な意味世界に生

きる人間にとつて、とくに視覚や聴覚情報が重要なもの
となり、それゆえ遠感覚が高等感覚ともよばれるのであ
ろう。

しかしながら、みる・きくは本来にそれほど高等な感
覚なのであろうか。たしかに遠感覚の世界は、身体から
離れて客観的に遠い刺激源を定位・認知しうるような印
象を強く帯びている。しかしそれゆえに、逆にどこか自
己にとつては胡散臭さを内包することになるのではなか
らうか。どこかにその遠感覚の世界（情報）に対する信
用のおけなさともいった感じである。そうはいつて
も、日常生活の中ではそのような疑いや、胡散臭さの意
識が前面に出てくることはない。むしろ、いつもは意識
の背後に潜んでおり、あまり疑いをもつことなく、じぶ
んのみえるもの・きこえるものに頼つて行動している。
なぜなら、もしこの感覚の世界に疑いをもちはじめ
ると、その途端にスムーズな生活に支障をきたしてしま
うからである。

近感覚は初等か

病的な強迫神経症という程ではないが、つぎのような経験をなされた方も多いのではないだろうか。私は単身赴任であり、職場の京都と金沢の自宅との往復である。

京都の宿舍を留守にして金沢へ帰るときは、必ず風呂場、ガス栓、台所の水道、火の元を点検して帰ることになる。とくに長い期間、宿舍を空けるときはなおさら念を入れる。しかし点検したつもりが、もしやと不安になって、せっかく出かけた途中でまた戻って確かめるとか、出かけたものの家が気になって仕方がなかった経験は、おそらくどなたでも多かれ少なかれあるのではなからうか。私も、何度も点検しては出かける。しかし、いったん気になってしまえば、出ては戻り、戻っては出ることの繰り返しで、その場所からなかなか離れられなくなってしまう。最後には、どこかでじぶんを納得させなければならぬ。

じぶんでも少し神経症的と思うほどであるが、私流の納得のさせ方を述べておこう。それは、ガス栓が締まっているのを見ても、やはりそれでも最後はコンロの穴にさわってガスが出ていないことを確かめ、ガスの臭いがないかを嗅いで確かめてしまう。風呂場の栓が締まっているのを見ても、押栓が確かに水平になっているのを手で触れて確かめ、さらにバスタブのなかにある暖気口に触れてしまう。エアコンとて同じである。リモコンのスイッチを押して、ファンが閉じているのを見ても、その下にいつて送風が止まっているかどうかを思わず肌でも確かめる。(じぶんでは病的と思いがらも)このような一連の儀式を済ませてから、もしこれでどうにかなくても仕方がないと、自分に納得させて出かけるのである。しかし、どなたも無意識のうちに似たり寄ったりの行動をしているのではないかと思うが。

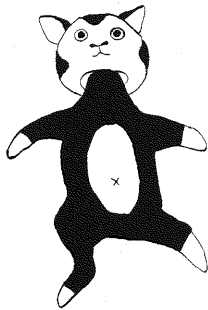
じつは、このような納得のさせ方には、共通する特徴がある。それは、視覚・聴覚といった遠感覚からの情

報、なかでも視覚（みえるもの）だけでは何となく頼りなく、最後には初等と称される、より身体に結びついた近感覚（さわる・かぐ・あじわう）に頼って安心するのである。同じじぶんの感覚ではありながら、そのみえていることやきこえていることには、何とはなく本当にそうなのかと不安が生じてしまうのである。視覚や聴覚の

世界は自己身体の外部に投影される、他者との間で共有し検証し合うことができるが、他方で身体から離れているがゆえに見間違ひ、聞き違ひといったことが起こりうるからである。しかし生身にはりついた自己の主観的な（近感覚の）世界にはそのようなことは起こらない。じぶんの身にはりついた主観的な感覚は、見間違ひ、聞き違ひの生じようがないものである。したがって最後にはじぶんの身体に密着するきわめて主観的な近感覚の世界に戻って確認するのである。このような私のエピソードをもち出さなくとも、同じような感じ方は、日常的な表現のなかにもみることができ。目前の見聞きしている

ことが信じがたく、思わず「ホッペをつねってみる」「我が目や耳を疑う」といった表現のなかにもうかがえるだろう。そのような感じ方が極端になると、不潔神経症のように、汚れが目にはみえないにもかかわらず、手の皮がすりむけるほど繰り返して手を洗わないと気が済まないということになるのである。

対人的な関係のなかにおいてもそうである。仲間と約束を交わすとき、「指きりげんまん嘘ついたら針千本飲ます」という文句がある。それはまさに、最後にはもつとも身体にはりついた近感覚をよりどころにしているのである。昔は、相手のことば（口約束）だけでは信用できず、それを書状として書き、最後にはじぶんたちの指先を切って血判を押し合うといった、きわめて身体的な痛みに



よつて納得させたのである。判子の朱印も、もとはそのようなどころに源があるのではなからうかと想像してみよう。これらはいずれも、じぶんの生身の世界から離れてみえるものや、きこえることだけではどこか懐疑的であり、最後にはやはりじぶんの主観的な生身で実感しないと安心できないのではなからうか。そのように考えると、近感覚こそ自己の確かな存在を実感させる感覚なのではないかと思われる。

根源的な感覚として

このようにみると、視覚・聴覚は高等で、それ以外の近感覚は初等なのであろうか。人にとって遠感覚が近感覚よりも優位で大切だと言われるが、生まれたときからそうなのであろうか。そこで発達の観点に立つて、これらの感覚がもつ意味について考えてみたいと思う。

最近の赤ちゃん研究によると、誕生早くにも遠・近の感覚は機能し始めるようである。しかしながら、赤ちゃん

んにとつて大切なのは、われわれのような遠感覚ではなく、むしろ近感覚が重要な役割を果たしているようである。赤ん坊の生存には養育者（母親）が欠くべからざる役割を果たすことは言うまでもない。さもなければ、ひとりて歩くことも、食べ物を摂取することもできない無力な赤ちゃんの生存はありえないからである。その際、そのような母子の緊密な結びつきには近感覚が中心的な役割を果たしているのである。母親の胸に抱かれ、母親の姿勢と一体化して動く、乳房から母乳を吸う、母親の匂いをかぐなど、といった身体に密着した近感覚を中心として母子の共生的な関係が展開するからである。さわる、かぐ、あじわうといった近感覚の受容器が主導的なチャンネルとなるのである。たしかに母親は抱いた赤ちゃんにやさしく語りかける。しかし、この母親の声も赤ちゃんにとつては遠感覚の刺激というより、むしろ身体に響く近感覚に近いものではなからうか。

このように考えると、赤ちゃんにとつては、遠感覚よ

りむしろ近感覚が、じぶんの存在を支えるうえで中心となる感覚であり、初期のモノや人との関係を取り結ぶ根源的な感覚とでも言えるのではなからうか。この根源的な感覚こそ、最初に出会う人との情動的な交流や信頼的な関係を形成していくのに欠くべからざるチャンネルとなるのである。このようにながめると、初等と呼ばれる感覚こそが愛着関係や自己感覚をつくりあげていく際の根底にあることがわかるであろう。その意味では決して劣った感覚としての初等ではなく、人にとって根源的な感覚として位置づけられるように思える。

遠感覚の世界へ

幼い子どもが怖い経験をしたときなど、「だいじょうぶよ」「だいじょうぶよここにいるから」と声をかけるよりも、母親が抱きしめてやる方が子どもは安心する。情緒的に混乱したときなども、ことばでなだめるよりも、むしろ抱きしめるといった身体的な接触の方が有効であ

る。このことは、子育てのなかでしばしば体験することである。したがって初期の母子関係では身体的な生身の接触が重要な意味をもつのである。

しかし発達にともなって主導的な感覚が、近感覚から遠感覚へとしだいに移行してくる。子どもにとって、みる・きくという活動が事物の認識や対人関係において主要な役割を果たすようになってくる。近感覚から遠感覚の世界、みる・きくといった身体から離れた遠感覚の働きによって外界が認識の対象とされ、対人関係においても視覚・聴覚を中心として展開されるようになってくるのである。たとえば、子どもは母親にしっかりと抱きしめられなくとも、向き合った母親の姿をみるだけで安心するとか、「だいじょうぶよ、ここにいるから」といった母親のやさしい声をきくだけで心理的な拠り所とできるようになってくる。まさに母子のかかわりが、さわる・かぐという密着した関係から、みる・きくといった距離化された遠感覚の世界にもとづくようになってくる

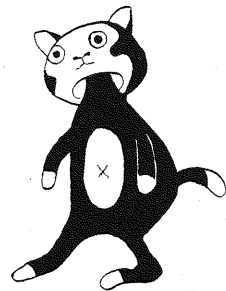
のである。そのうち、目前に母親の姿や声がなくとも、母親の姿を思い浮かべ、母親の声を思い起こすだけで、じぶんの心理的な拠り所としうるようにもなつてもく。それによつてそれまでの心身一体的・共生的であつた母親からの心理的な自立（距離化）も可能になつていくのである。まさに自我が芽生える三歳も近くには、このような形での子の分離が可能になり、子どもの心理的な自立（心理的離乳）が始まるのである。

このような遠感覚の世界への移行は、ことばという記号を手に入れることによつて、さらに促されていくことになるように思われる。みる・きく世界はことばによつて概念化され、それが外界の意味世界をつくつていくのである。それにともなつて、近感覚の世界は二次的なものとして背後におしやられてしまうことになる。

スキンシップということ

以上のように考えると、そもそも自己が成り立つ根源

となる感覚は、初等とよばれる近感覚なのである。この生身と結びついた近感覚こそが、他との関係を取り結び、自己形成の最初の



基盤となるものである。じつは、その基盤の上に、ことばが飛び交い、視覚を介した、みる・きくというわれわれの世界が成り立つてくるのである。しかし、その一方においては、この世界がじぶんの直接的な身体性から離れていくということでもある。だからこそ、やはり最後には手に触り、鼻で嗅いでみるという身体にはりついた主観の世界に戻つて確かさを実感することになるのである。このことはわれわれとて同じであり、人は不安になると、絶えずそこに還つていこうとするのである。

不幸にして、初期の母子関係において、そのような近感覚に基づく一体的な関係が十分には形成されなかった

とき、それが後の育ちにおいてさまざまな問題（自閉的な症状やことばの遅れなど）を生じさせる。これは発達臨床の場面においてもしばしば指摘されてきたことである。その際、初期の母子関係をやり直すという臨床的な指導方法がしばしばとられる。おんぶ、だっこ、添い

寝、イナイナイバー、追いかけてこなど、ぴったり人にくっついて安心する体験、身体的接触をともなった母親との楽しいかかわり体験をもたせるといったものである。いわゆる近感覚の世界を中心としたやりとりによって、それまで不足していた身体接触がとられるのである。そのような取り組みのなかで、しだいに子どもの方も母親に身体的な接触を求める行動（いわゆるべったりと甘えるといった愛着）をみせ始め、そのなかでしだいにことばでのやりとりも出現するようになってくる、といった変化がみられるようになるという。子どもとの関係ができてくると、その兆候として近感覚にもとづく身体的な接触が出現し始めるのである。甘えのやり直し

行動なのである。このようにみると、（愛着や信頼性といった）対人的な関係性は、まずは身体的な水準から始まり、そこに原点があるように思われる。そのような基盤があつて、その上に遠感覚によつた対人的な関係性が成り立ってくるのである。

幼い子どもにとっては、とくに近感覚を中心としたかわりが初期の発達にとつて重要な意味をもつのである。和製英語ではあるがスキンシップという俗語がある。これは互いに直接触れ合う、肌と肌の接触（タッチング）が、初期の母子関係の形成、ひいては乳幼児の情動や社会性の発達にとつて重要であると言われてきた。そのようなスキンシップの意味も、このような近感覚・遠感覚の発達とその機能という観点から捉え直してみると、今までとは異なつた新たな意味合いをもつてくるように思われる。

（京都教育大学）